

# 身体の社会学　ギデنز社会理論の場合

宮　本　孝　二

キーワード：身体の社会学，ギデنز，構造化，ハイモダニティ

はじめに

第1節　構造化理論と身体概念

第2節　ハイモダニティ論と身体問題

第3節　『社会学』と身体の社会学

おわりに

はじめに

筆者はこれまでほぼ30年，イギリスの社会学者アンソニー・ギデنزの社会理論についての検討を続けてきた。1990年代後半に至るまでのギデنز社会理論の全体像については『ギデنزの社会理論　その全体像と可能性』にまとめ，その後も個別テーマについてギデنز論を書き継いできた<sup>1)</sup>。本稿はそのような筆者のギデنز社会理論研究の一環として位置づけられる。では，なぜ身体の社会学なのか。

日本においても，この20年間に身体の社会学は徐々に展開されてきた。身

---

1) 宮本(1998)以降のギデنز論は宮本(2000),(2002),(2006),(2008)以外はすべて『桃山学院大学社会学論集』に掲載し，国立情報学研究所のCiNii(論文情報ナビゲータ)において無料公開している。

体の社会学をタイトルとした研究書も近年いくつか出されている<sup>2)</sup>。筆者もまた、このテーマについて関心をもち考察を試み始めたが、ギデンズの著作に身体についての言及がかなり見られること、これまでの筆者のギデンズ社会理論研究ではその点を詳細に取り上げてこなかったことに今更ながらに気づき、ここに本稿を提示するに至ったのである。

まず第1節では、ギデンズの一般理論としての社会理論である構造化理論において、身体概念がどのように位置づけられ展開されているのかを、1970年代半ばから80年代半ばに至るギデンズの2つの著作、『社会学の新しい方法規準』および『社会の構成』に見ることにしたい。そこで明らかになるのは、行為・相互行為から構造・変動に至る諸領域における身体概念にかかわる諸論点である。

次に第2節では、ギデンズの全体的社会理論である現代社会論において、身体問題がどのように論じられているのかを、90年代初めのギデンズの著作『モダニティと自己アイデンティティ』に見ることにしたい。そこでは高度近代（ハイモダニティ）におけるアイデンティティ問題に、身体が深くかかわっていることが明らかにされよう。

さらに第3節では、90年代初めから現在に至るまでギデンズが数版にわたり刊行してきた大部のテキスト『社会学』において、身体社会学がどのように位置づけられ、その内容が構想されてきたかを示したい。身体社会学がどのような視点で、現代社会における身体問題のどのようなトピックスを取り上げるべきなのか、あるいはまた取り上げうるのかについて考察を進めよう。

そして最後に、構造化理論やハイモダニティ論や社会学テキストにおけるギデンズの身体社会学の達成点に基づいて、身体社会学の全体の輪郭を描き、主要論点を整理する試みを行いたい。

---

2) 近年のこの分野での出色のものに後藤(2007)がある。

## 第1節 構造化理論と身体概念

ギデンズは構造化理論の概要を1976年の『社会学の新しい方法規準』で初めて提示し、79年の『社会理論の最前線』で構造化理論の主要論点を掘り下げ、84年の『社会の構成』でその体系化を図った<sup>3)</sup>。身体にかかわる論点は、まず『社会学の新しい方法規準』に示され、『社会理論の最前線』には登場しなかったが、『社会の構成』では索引において該当箇所が十数ページが挙げられるほど論じられることになった。それではまず『社会学の新しい方法規準』における身体概念の位置づけから見ることにしよう。

ギデンズの構造化理論は、1973年の『先進社会の階級構造』で明らかにした階級構造化という発想を踏まえ<sup>4)</sup>、それを一般理論的ないし方法論的な社会理論として精練する試みであった。社会学ないし社会理論の歴史を総括したギデンズは、パーソンズの社会理論とそれに対抗する解釈（理解）社会学、という理論状況を描き、同時にまた実証主義批判の新しい流れの登場に注目し、自らの立場として解釈（理解）社会学ないし主観主義的立場への共感的批判（肯定的批判）を選択した。すなわちシュッツの現象学的社会学、ウィンチらの日常言語哲学、ガーフィンケルのエスノメソドロロジーの要点をまとめ、それらが行為主体としての人間のもつ理解能力、すなわち意味形成能力、意味解釈能力を基本にすえ、人々の実践する意味解釈についての意味解釈を社会学の方法論的規準としたことを、パーソンズの規範主義的、構造機能主義的なシステム中心の主体軽視の立場に比較して高く評価するのである。しかし同時に、それらがもついくつかの弱点を指摘し、その克服の方向性を明示した<sup>5)</sup>。

すなわち第1に、行為を意味ないし言語的側面に限定してしまい、実践と

---

3) ギデンズ(1976, 2nd. ed., 1993=2000), ギデンズ(1979=1989), ギデンズ(1984)。

4) ギデンズ(1973=1977)。

5) ギデンズ(1976, 2nd. ed., 1993:59-60=2000:104)。

しての行為の全体像が見失われていること、したがって第2に、行為ないし相互行為におけるパワーが占める中心的位置を認めていないこと、それゆえ第3に意味解釈に作用する条件としてコンフリクトがありうることを考えていないこと、第4に制度的変動や歴史には無関心であること、などであり、これがまさに共感的批判なのである。

こうしてギデنزを目指すべき社会理論の方向性を確定し、行為概念を彫琢した。その成果が、意味と資源の区別であり、行為は意味の流れとともに資源の流れでもあることを明らかにした。解釈（理解）社会学による意味や言語の重視は当然であるが、行為はそれだけではなく行為の手段（用具、ファシリティ）すなわち資源の連続的、相互媒介的使用でもある。アクション（行為）ないしエージェンシー（主体的な行為形成作用）とは「世界内事象の進行中の過程における、身体的存在による、実際に生起する、ないし意図されている因果的介入の流れ」である<sup>6)</sup>。見られるように、まさに身体がここに登場した。行為は一連のよどみない流れであり、主体のリフレクシヴな作用（モニタリング）がそれをアクト（単位行為）としてはじめて意味確定し文節化しうる。また、資源を重視し、意図と行為の帰結を同一視しないということは、意図せざる帰結の重要性を示唆している。

『社会学の新しい方法規準』において、身体への言及は、行為の定義に登場しただけであるが、それが行為における目標形成過程と相互媒介的に関連しつつ進行する資源動員過程（身体こそ行為の起点となる資源にほかならない）の重視につながり、資源動員可能性としてのパワーというとらえ方にまで展開しえたということが重要である<sup>7)</sup>。意味の社会学や機能主義はいわば目標形成過程に過剰に重点を置いているが、社会理論における資源動員過程への

---

6) ギデنز（1976, 2nd. ed., 1993:81 = 2000:137）。

7) このようなパワー概念をギデنز社会理論の基軸に据えてその全体像と可能性を提示したのが宮本（1998）であり、また宮本（2009）ではパワー概念を基軸に据えて社会理論の新たな体系的整理を試みた。

重視をギデンズは唱えたのであり、その提唱の基底には身体への注目があると言えよう。

ギデンズは70年代後半から80年代前半にかけて、一般理論の彫琢を進めるとともに、マクロな変動論としての現代社会論構築の作業をも推進し、パワーの最高特殊形態ともいうべき国家権力に焦点をあわせた著作も出し<sup>8)</sup>、一般理論とマクロな社会理論の相乗的な成果として84年に『社会の構成』にまで到達した。それは行為論から社会過程論を経てマクロな構造論と変動論へ至る体系的著作であり、「構造化理論の基本要素」、「意識・自己・社会的出会い」、「時間・空間・域化」、「構造・システム・社会的再生産」、「変動・進化・パワー」、「構造化理論・経験的研究・社会批判」といった諸章からなり、身体概念がかかわる論点は次のように列挙される。活動性、自律性、コミュニケーション、拘束要因、統制、発達、規律、表局域・裏局域、活動的自己のありか、再生産、空間性、時間などである。これを初出順に配列しなおすと、活動的自己のありか、時間、自律性、統制、発達、表局域・裏局域、空間性、活動性、コミュニケーション、拘束要因、規律、再生産となる。

まず序章ともいうべき「構造化理論の基本要素」の最終節「時間、身体、出会い」において、あらゆる社会システムは、いかに大規模で広大なものであろうとも、日々の社会生活を表現し、またそこに表現されるのであり、人間の身体の物理的で感覚的な属性を媒介していること、ただし身体は活動的な自己の「ありか」であり、その「担い手」である有機体の物理的特性の拡張ではないことが強調される<sup>9)</sup>。

第2章「意識・自己・社会的出会い」のなかの「無意識・時間・記憶」では身体統制のオートノミーが論じられる<sup>10)</sup>。「自我」は行為の反省的モニタリングの本質であり、主体とも自己とも同一視してはならない。「行為主体」な

---

8) ギデンズ(1981)、ギデンズ(1985=1999)。

9) ギデンズ(1984:34-7)。

10) ギデンズ(1984:45-51)。

いし「行為者」は、生命有機体の身体的時空内に位置づけられる全体的人間主体と定義される。主体は想起によって行為の源泉を反省的に特徴づけるが、想起の諸形態の総和が自己なのである。自己とは行為主体によって特徴づけられる主体なのである。自己、身体および記憶はそれゆえ密接に相互に関係づけられている。

第2章では次に「ルーティン化と動機づけ」で、行為する自己のありかであり、時空間に位置づけられるものである身体への関心が、ゴルフマンのテーマを議論し分析する際の鍵となる視点であることが示される<sup>11)</sup>。そして「存在・共在・社会統合」で、日常生活は最も洗練された組織にとってさえ基本的であること、日々の活動過程において人々は相互行為の状況的文脈において相互に出会うこと、相互行為は物理的に共在する他者たちにおいて展開し、共在の社会的特性は身体の空間性、他者を経験している自己への志向性に根差していることが指摘される<sup>12)</sup>。人間は行為を演じる手段として身体を使用するが、行為連続性へ身体を統合することが重要である。行為の文脈性においてのみ、身体は展開され、その所有者によって身体として理解されるからである。ただし、基本的には日々の行為の流れでの身体的活動の時間空間的文脈性に依存するよりはむしろ、動きと行為（明確な展開としての）の対照性に依存しているとギデنز<sup>13)</sup>は論じ、次のように続ける。

行為の流れにおけるそのような身体の活動は、存在論的安全、すなわち日常生活の連続性に示される世界と自己の連続性への信頼に直接包含される。動作や接触感にかかわるすべては、身体に向かうにせよ対象に向かうにせよ可能な行為の中心としての身体から発する一群の意図をまとめあげる意識を引き起こす。身体は未分化の統一体ではない。人間存在において顔はたんにしゃべるための発生的な起源にとどまることなく、経験や感情や意図の絡み合いが書き込まれている支配的な領域である。表現やコミュニケーションの

---

11) ギデنز (1984:60 4)。

12) ギデنز (1984:64 8)。

媒体としての顔の重要性は、ゴフマンによって極めて鋭く明らかにされたように道徳的な意味を含んでいる。共在における行為の場での身体のコントロールと顔の幅広い影響力という二つのテーマはゴフマンの著作全体に本質的なものである。共在という概念こそ、身体の認知的およびコミュニケーションの様相に根差すものなのである。

そして「連続性」においては、出会いが日常生活の連続性のなかに挿入され、連続性に形態を与える連続的現象であること、社会生活の連続性を構成する出会いの多くは、社会的出来事に見られる集まりの外部（時間空間的）に、あるいはそれを背景に生じること、そのような状況においては、身体的反省的モニタリング（身振りや位置どりの）が周囲からの関与を閉鎖するのに使用されること、などが論じられる<sup>13)</sup>。

続いて第3章「時間・空間・域化」では、時間地理学の成果に言及しつつ、身体の特長である有体性の限界（分割不可能）、時間および空間の容量の限界、移動の限界、課題遂行の限界（一度に一つ）が指摘され、ここでも表局域と裏局域、出会いにおける身体的位置どり、身体の域化などのゴフマンの概念の検討が中心となる<sup>14)</sup>。域化による表局域と裏局域によって、主体の有体性の限界はあるものの、身体的位置どり、身体の域化が行為の可能性を確保するといった、時間空間における身体的位置どりの問題、表局域と裏局域にかかわる論点が中心となる。ギデンズはフーコーの指摘した工場の時間・空間における身体規律について、そこにおいてさえ人間が表と裏の場を駆使することによって対抗可能性を発揮しうることを強調する<sup>15)</sup>。構造化理論の基本要素には人間が能力ある主体であることの確認がある。フーコーの例示する全制的施設は日常的な場ではなく、全制的施設においてさえコントロールの弁証法が成立可能であり、日常的な場では一層コントロールの弁証法の可能

---

13) ギデンズ（1984:73 8）。

14) ギデンズ（1984:110 29）。

15) ギデンズ（1984:145 58）。

性が拡大するというのがギデンズの立場なのである。

次の第4章「構造・システム・社会的再生産」では、とくに「拘束性の3つの意味」において身体にかかわる論点が登場する<sup>16)</sup>。ギデンズは物質的拘束、サンクション的拘束、構造的拘束の3つの拘束性を設定し、それらとの関連で物質的拘束にかかわる身体の拘束的側面をまず明らかにする。それは人間の身体の肉体的能力や物理的環境がもたらす限界であり、身体の分割不可能性であり、さらには人生の有限性である。身体には感覚的能力、コミュニケーション的能力があるが、それらは行為を可能にする特性であるとともに、拘束的特性ももたざるをえない。ただし、拘束性は変化するものであり、たとえば電子的コミュニケーションの発明は身体の現前と感覚的媒体との関係を変えた。すなわち、新たなコミュニケーションの媒体は新たな可能性と拘束性をもたらすのである。これは、身体の移動の媒体についても同様であろう。なお、サンクション的拘束および構造的拘束の条件にさらされながらも同時にそれによって可能にされる人間のパワーについては、その被拘束的側面は暴力から不同意に至るまでの多様なサンクションとして経験されるが、一方的な完全な強制はほぼありえず、他者の多少の同意（黙認）が不可欠であり、コントロールの弁証法が成立することが強調される。

そして第5章「変動・進化・パワー」では、構造化理論におけるパワー概念の中心性が明示され、それとの関連で身体概念が取り上げられる<sup>17)</sup>。すでに『社会学の新しい方法規準』でも遂行されたように、ギデンズはマルクスとパーソンズのパワー概念の統合を目指す。マルクスの史的唯物論は破綻したが、コンフリクトとパワーについては再構築が可能であり必要でもあるという立場であり、パワーを分裂や利害対立と過剰に結びつけたことや、パワーからの自由とパワーの脅威を強調したことを批判しつつ、パワーが成果を生み出す能力であり、自由や解放の媒体であることを把握する視点を確立し

---

16) ギデンズ (1984:174 9)。

17) ギデンズ (1984:256 62)。



ていたことを評価する。パーソンズについては、規範の対立や実力・暴力の過小評価を批判するが、動的で拡大可能なパワーという視点は有効であると高く評価する。こうしてギデنزは、成果を生み出す能力としてのパワー、自由や解放の媒体としてのパワー、動的で拡大可能なパワーというパワー概念を手に入れたのである。

そのようなパワーの配分システムが支配構造であり、支配構造を構成するパワーの基礎となる資源が分配的資源と権威的資源である。分配的資源は物的であり、生産手段であり、商品生産にかかわる。権威的資源は社会的時間空間の組織化、身体を生産と再生産（相互連携における人間の組織化）、生活機会の組織化（自己発達と自己表現の機会の構成）にかかわる。分配的資源のもつ変革力、分配的資源の蓄積が時間空間遠隔化と社会の存続を可能にしてきたのはマルクスが強調するとおりだが、物的資源の蓄積がパワー拡大の基礎にあるとしても、その蓄積が権威的資源なしにありえないことを忘れてはならない。社会的時間空間の組織化は日常の時間空間経路を構成する諸社会の域化であり、身体を生産と再生産は域化された社会における人間そのものの維持増大とその組織化であり、生活機会の組織化はそれら人間主体に開かれた生活機会のもたらす可能性を総合する。

支配的パワーの拡大は分配的資源や権威的資源の蓄積に基づき、その蓄積は時間空間を結合させる媒体となる。これらの資源の蓄積は社会関係を永続させる情報と知識の保存を含み、権威的資源の蓄積貯蔵体は共同体そのものであり、それは都市から国民国家へと発展していったのである。

最後の第6章「構造化理論、経験的研究および社会批判」では、「基本概念の再確認」がまず行われ、その第3で次のように述べられる<sup>18)</sup>。日常生活の研究は制度化された実践の再生産の分析に統合されている。日常生活は可逆的時間の反復的特性、時間空間を走る経路、身体の拘束的および可能的特性

---

18) ギデنز (1984:282-4)。

に結びつけられる。しかし日常生活は社会生活の一層派生的な結合が展開する基礎ではない。社会統合とシステム統合の区別によって一層遠距離の結合を理解すべきであるとギデنز<sup>19)</sup>は考える。身体が重要な位置を占める分析的局面と、それを超越したシステムの展開の局面とを区別と関連のもとで把握する立場を提示していると言えよう。

## 第2節 ハイモダニティ論と身体問題

前述のようにギデنز<sup>19)</sup>は全体的な現代社会論について、1973年の『先進社会の階級構造』で本格的展開を開始し、80年代に入ってから『史的唯物論の現代的批判』や『国民国家と暴力』を発表したが、それらは資本主義ないし産業主義と国民国家に焦点を合わせたものであった。しかし、90年の『近代の帰結』でハイモダニティ論として現代社会論の新機軸を打ち出し、91年の『モダニティと自己アイデンティティ』ではアイデンティティ問題に的を絞るに至ったのであった<sup>19)</sup>。

『モダニティと自己アイデンティティ』は全体の要旨を述べた序章と「ハイ・モダニティの輪郭」「自己：存在論的安全と存在不安」「自己の軌跡」「運命、危険および安全」「経験隔離」「自己の苦難」「ライフ・ポリティックスの登場」の7つの章からなる。それでは各章における身体論を見ていこう。

まず序章では、自己のリフレクシヴィティは心的過程と同時に身体にも広く影響を及ぼすこと、身体はますます外部的な与件でなくなり、それ自体リフレクシヴに活用されるものになることが指摘される。そして、身体の外観のナルシスティックな開拓への大規模な動きのように見えるものは、実のところ身体を活発に構築し制御することへの深い関心の現れなのであり、ここに身体の発達とライフスタイルとのあいだの不可欠な関連が見られ、それは特定の身体体制の追求に明確に現れると論じられる。さらに注目に値する

---

19) ギデنز (1990 = 1993), ギデنز (1991 = 2005)。

点として、生物学的な仕組みや過程の社会化（社会的な要因連関へのまきこみ）が挙げられる。すなわち、遺伝子工学および医学が介入する多様な領域において、身体は選択の対象になっているということ、身体発達の個人的な側面とグローバルな要因とのあいだには密接なつながりがあり、生物学的再生産技術ないし遺伝子工学は、自然が人間行為の領域に組み入れられていく大きな流れの一部を構成することが指摘されている<sup>20)</sup>。

第1章「ハイモダニティの輪郭」ではモダニティの制度的条件と、それが現代社会をいわば危険社会、リスク社会とすることが指摘され、本書の議論全体の前提となるハイモダニティのトレンドが明らかにされる。現在の社会状況をポスト・モダニティというよりも高度ないし後期モダニティ、ラディカル化したモダニティと規定し、その3つの制度的特性として時間と空間の分離ないし再組織化（歴史意識、未来の植民地化、グローバル化）、離床メカニズムの拡大（抽象システムの発達）、制度的反省性を挙げる。モダニティにおいては、すべてが反省的に懐疑され、問い直される可能性をもつので危険は必然的となる。人々の個人的意味づけ、生活の意味づけが問題化され、反省によって意味が問い直され、それに基づいて人間が選択を行い社会を形成するということに現代社会における構造化特性が見いだされる。そしてそのような選択を強いられる社会をリスク社会とよぶ。

リスク社会に生きる人間の意識やパーソナリティはどうなるのか。ギデンズはそれを自己と名づけ、モダニティの制度的条件の下で形成される自己の基本的ありかたを第2章「自己：存在論的安心と実存的不安」において論じる。自己は当然ながら身体化されている。身体の輪郭や特性についての意識は、子どもが対象や他者の特徴を学びとることを通じて形成され、世界に対する根源的な探求のまさに出発点となる。自己意識は身体の分化をつうじて現れるのであり、身体はたんなる実体ではなく、外的状況や出来事に対処す

---

20) この段落はギデンズ（1991:78=2005:8）。

る実践的様式である。すなわち日々のプラクシス、対象世界や他者との実践的關係において身体は実存する。文脈性とインデックス性を示す表情や身振りを、継続的なモニタリングによって維持できなければ能力ある行為者になることはできないだろう。社会的相互行為のあらゆる場面で、個人に期待される身体のコントロールは細部にわたり徹底的で限りが無い。能力ある行為者は、継続的コントロール維持だけでなく、そう振る舞っていると他者から見なされなければならないのである。ルーティン化された身体のコントロールによって、いわゆる保護被膜が維持されるのであり、状況のもたらし脅威や危険に直面する経験を経て、状況に対応した身体的経験や身体的スキルにより安心が獲得される。こうして身体の自己管理は常に完璧が目指される<sup>21)</sup>。

この身体の自己管理を、フーコーは権力の仕組みとの関連で論じた。規律＝訓練的権力の焦点に身体は置かれ、前近代では外的に身体に刻印されたものが近代では自己コントロールとなり、内的な規律＝訓練が柔順な身体を生成するという主張である。これに対しギデンズは、身体と行為主体を同一視したり、行為者は身体に権力を足したものととらえる見方を、有効ではないし洗練されてもいないと批判し、身体的訓練が能力ある行為者をつくるのであり、これは文化の差異を超えていること、日常的な身体コントロールは、行為主体の特性であり、他者から受容されるためにも不可欠であることを強調する。身体の定型化されたコントロールは自己アイデンティティの生活史が維持される基本的手段であり、自己は身体化され他者に表示される。正常な外観は身体上の定型であり、正常な外観への入念な配慮が求められる。他者の承認が身体の統合性の感覚、自己が安全に身体に宿っているという感覚をもたらす。正常な外観が生活史の物語と整合的に保たれているかは、存在論的安心の感情にとってきわめて重要な事柄である。身体統合の何げない受容を維持できない人にとって、正常な外観を維持する努力は重荷になる。日々

---

21) この段落はギデンズ (1991:56 7=2005:60 2)。

の社会生活のコンテクストには、参加者による身体への継続的な働きかけが含まれる。それらは身体のコントロールや表情という点で実践的意識に深く染み込んでいるのである<sup>22)</sup>。

身体は行為の媒体というだけでなく、ケアされるべき身体組織である。人生の最初の数年間は自分でケアできない。幼児にとって日常的ケアは基本的な信頼環境である。身体に必要なものが付与される体制、すなわち食事、服装、性、服装にかかわる身体体制の生成が必要である。ルーティンは継続的な身体のコントロールを伴う。身体体制は、身体の有機体的欲求を厳しくコントロールすることを伴う学習された実践である。それは自己の規律＝訓練の様式であり、それは社会的慣習と個人的好みや傾向とによって形成される個人的習慣である。身体体制においては外観と習慣が結び付けられているのである<sup>23)</sup>。

食事の体制については、食事の習慣それ自体が儀礼的表現であり、体型へも影響し、その背景には自己像が示されること、性の体制については、食事の禁欲と同様に、性的禁欲は宗教的価値というよりパーソナリティ障害の現れであること、自己装飾の体制については、自己呈示の手段であるとともに、生活史における隠蔽や開示と関係すること、慣習をアイデンティティの基本的側面に結び付けるべきことが示される。ジェンダーの管理についても、男性や女性であることは身体や身振りの恒常的モニタリングに依拠していること、ジェンダーが「行われる」ための身体呈示と管理の詳細が知られていることが指摘される。なお、羞恥の経験は自己の可視的な側面である身体にしばしば集中するが、同時に羞恥にはプライドや自尊心に対応する肯定的な相関物があるという<sup>24)</sup>。

第3章「自己の軌跡」では、自己反省の目が人生のありかた全体に向けら

---

22) この段落はギデンズ (1991:57-62 = 2005:62-7)。

23) この段落はギデンズ (1991:62 = 2005:68)。

24) この段落はギデンズ (1991:62-3 = 2005:68-9)。

れ、ライフ・スタイルの選択が問題化されるようになる理由が説明される。モダニティにおいて問題化される自己アイデンティティは、過去から予期される未来への軌跡における連続的な自己解剖や自問自答によって形成されるのであり、それを通じて真の自己と自分が考える自己が実現される。ライフ・コースは自己実現が反省的に遂行される軌跡であり、ライフ・コースにおける多様なリスクと、リスクをもたらす制度的条件が同時に提供してくれる機会のはざままで自己実現が遂行されるというわけである。自己実現、すなわち自己アイデンティティの形成とは、自己と諸存在すなわち自然、未生の人間（胎児）、他者、自己自身との関係のありかたへの反省的意味づけの全体なのであり、反省的な目はグローバルな世界にも、パーソナルな問題すなわち親密な他者との関係や自分の身体などにも向かうことになる。

こうして自己のリフレクシビリティは身体にまで拡張される。身体的過程が観察され、身体が意識される。身体器官からの感覚的インプットが意識的に監視される。そのような身体意識には運動やダイエットの必要性を意識することも含まれる。たとえば、一日の中でいつ何を飲み食いするかを人は決定しているのである。こうした身体意識は身体体制を構築する。身体を経験することは自己を統合された全体としてまとめあげることであり、身体は個人にとってまさに生きている場所にほかならない。また、自己や純粋な関係性の領域に当てはまることは、同様に身体の領域にも当てはまる。身体はハイモダニティにおいて一層社会化され、社会生活のリフレクシブな組織化に引き込まれてくる。その結果、身体と自己実現は密接に関連し、自己アイデンティティの一貫した感覚の維持にとって、身体が日常生活の相互行為に実践的に埋め込まれていることが重要となる。自己や自己アイデンティティに関わっている身体の側面の重要性が増し、身体的な外観とその活用（振る舞い）、官能性、そして身体体制の意義が高まる<sup>25)</sup>。

---

25) この段落はギデンズ（1991:77 8, 98 = 2005:85, 110）。

多様な相互行為場面を通じて安定した振る舞いを維持することは、自己アイデンティティの一貫性の正常な保持の重要な手段となる。振る舞いが、身体に安住している感覚と、個人化された物語とのつながりを維持する。ふつうの外観を維持し、同時に時空を超えて個人的継続性を確信するためには、振る舞いは個人化された物語に効果的に統合されていなくてはならない。ハイモダニティにおいては、外観も振る舞いも化粧や服装のモードも所与のものとして組織できないのである<sup>26)</sup>。

また、官能性のパターンと、それに直接影響を及ぼす身体体制についても、近代のリフレクシヴィティの対象になってきている。ハイモダニティにおける身体体制と官能性の形成には継続的にリフレクシヴな注意が向けられ、選択の複数性がもたらされる。生活設計すること、ライフスタイルの選択肢を採用することが身体体制と統合させられる。人間は自分自身の身体をデザインする責任を負うようになったのであり、よりポスト伝統的になればなるほどそうするように強制される。この点が明確になるのは、身体的外観とスリムさへの強迫的な執着である拒食症においてであろう<sup>27)</sup>。

第4章「運命、リスク、安全」では、自己がそのライフ・コースで多様なリスクに遭遇すること、モダニティでは抽象システムとなった専門化された科学・技術がそのリスクに対処すること、しかしそれは同時に自己の脱技術化であり無能化であること、それゆえ自己は再技術化、パワーの回復を目指すことが明らかにされる。抽象システムの下で生きる自己は、そのような状況の中で再技術化を志向するのである。そのためリスクが高まり、それに対応して信頼や保護皮膜の必要性が高まる。個人は身体なしに存在できず、身体は有形の自己であり、時間空間において、日々の状況において保護され援助されねばならない。身体はたえまなくリスクにさらされ、傷つきやすさを負わざるをえない。日々の生活の習慣的状況において身体的・心理的くつろ

---

26) この段落はギデンズ (1991:99 = 2005:111 2)。

27) この段落はギデンズ (1991:99 108 = 2005:112 22)。

ぎを獲得するには、長い訓練、習熟した注意深さが求められる。それらは定型的な行為が前提とする保護皮膜の生成にとって重要である。保護皮膜とは、環境世界の機能維持を可能にする信頼の覆いにほかならない<sup>28)</sup>。

第5章「経験隔離」ではこの抽象システムが存在の意味を問い直す機会となる逸脱や病気や死や性などの諸経験を隔離してしまい、道徳の意味を抑圧してしまうことが指摘される。犯罪、狂気、病気、死、性、自然などの経験を、それ自体として問題化し隔離し抽象システムの手にはゆだねることは、リスクをもたらす経験に対して人々の存在論的安全を保障する意義をもつが、同時に多くの人間からその種の経験の意味を問い直す機会を奪い、道徳の意味の探求を抑圧するのである。そして、それらの経験には身体問題が深くかかわっていることは明らかである。また、この章では、ナルシズムの議論との関連で、自己と身体の関係が、身体こそ自己アイデンティティの反省的プロジェクトの核心部分であるという指摘によって明示される<sup>29)</sup>。

第6章「自己の苦難」では、モダニティの制度的条件の下で生きる自己が、パーソナリティのジレンマに苦しみアイデンティティを確立しようと苦闘せざるをえないことが述べられる。統一化と断片化、無能さと有能性、信頼性と不確実性、個性化と商品化といったジレンマである。そしてこれらの背後を流れているのが無意味さの脅威である。道徳の意味の復活のためには、道徳的問いを争点化する必要がある。そこで、抑圧されたものの回復が目指される。死、狂気・犯罪、性、伝統、宗教、そして新しい社会運動の争点である環境、平和、人権などの多様な問題が問い直されるようになるわけである。また、この章では、純粋な関係性にかかわる議論において、自己アイデンティティの物語の構築が自己と身体の関係の構築につながる事が指摘されている<sup>30)</sup>。

---

28) この段落はギデンズ (1991:126 33 = 2005:143 51)。

29) この段落はギデンズ (1991:155 69, 177 8 = 2005:176 91, 200 1)。

30) この段落はギデンズ (1991:185 208 = 2005:210 36)。



最終章「ライフ・ポリティックスの登場」では、自己が存在との関係において自己アイデンティティを再構築し、自己実現をはかるという運動がライフ・ポリティックスを形成していることが示される。ライフ・ポリティックスのライフとは、文字どおり生命であり、生活である。ポリティックスをギデنزには広い意味の政治として設定し、ライフ・ポリティックスの特性を3点にまとめる。第1に、選択の自由および生成的パワー（変革能力としてのパワー）という前提に基づく、生のありかたの選択を争点とする政治的決定を目指すこと、第2に、グローバルな規模に拡大した相互依存のコンテクストの中で、自己実現を推進することができ、かつ道徳的に正当化しうる生活形態の創造を目指すこと、第3に、脱伝統の時代である現代社会において、後述の存在問題にいかに対応するか、すなわち、いかに生きるべきかという問題を解決するにあたって必要な倫理の発展を目指すことである<sup>31)</sup>。

ライフ・ポリティックスの争点は、大きくわけて4つの領域に発生する。ギデنزが存在問題と名付けるものがそれだ。人間存在の環境を構成する存在物、人間存在の有限性、生活の個人性と共同性、自己アイデンティティという4つの領域に、生存、超越、協同、個性という4つの道徳アリーナがそれぞれ対応し、さらに内的準拠システムとしての自然、再生産（人間の）、グローバル・システム、自己と身体の4つが対応し、それぞれに実質的な道徳的争点が生じる。存在問題は道徳的争点を生み出し、それは固有の自律的なシステムにおいて問題化されるというわけである。身体問題は第2の再生産問題と第4の自己と身体に関連問題に見られる。再生産問題はとくに胎児の身体に焦点が合わせられ、中絶や医療とのかかわりが問われる。また自己と身体との関連についての問いは、自己と身体が多様な新しいライフスタイルの選択の場となったことを焦点化する<sup>32)</sup>。

以上のように、ギデنزにはハイモダニティ論において、2つの身体問題に

---

31) この段落はギデنز（1991:214-7=2005:242-6）。

32) この段落はギデنز（1991:217-20, 225-6=2005:246-50, 255-6）。

焦点を合わせていた。身体が反省的な意味づけの対象になること、その反省的な意味づけの起点には社会と文化の条件による作用が見られること、これはゴフマンやフーコーに言及しつつ、ハイモダニティ論においてギデンズが強調したことであった。しかし、もう1つの身体問題を見逃してはならない。序章においてもすでに指摘されていたことであったが、身体問題には所有の論点と再生産の論点があり、所有の論点は意味づけの問題にかかわり、再生産の論点は生殖や胎児の問題にかかわる。ギデンズが提示する実存的問題の第2番目がまさに再生産の問題なのであった。

### 第3節 『社会学』と身体社会学

ギデンズは1989年に部厚い教科書『社会学』を刊行し、以後2009年までに増補改訂を重ね、最新版は第6版となっている<sup>33)</sup>。本節では、まず『社会学』における身体社会学の内容と位置づけ、その変遷を見ることにしよう。そしてそれを手掛かりに、また第1節および第2節での紹介に基づいて、現代の身体問題を対象とした身体社会学の全体像について検討しよう。それは社会学全体における身体社会学の位置づけについての問いでもある。

『社会学』第6版の第10章「健康、病気、障害」が現時点でのギデンズの構想する身体社会学の内容を示すと見るできるので、まずそれを紹介しよう<sup>34)</sup>。そこでは、導入部で飢餓のアフリカの少女とイギリスの拒食症の少女の写真を対比させつつ、それを題材に序節にあたる部分で拒食症に影響し作用する女性の身体イメージ、すなわちスリムな容姿を求める強迫観念や、医療から食品に至るテクノロジー（社会的テクノロジー）を指摘しつつ、身体社会学という研究領域を提示する。身体が社会的影響を受ける現象全般を対象とする身体社会学は、ここでは社会的要因が健康状態や身体的能力に及ぼす作用に焦点が合わせられ、身体社会学は健康と病気の社会学とし

---

33) 初版ですでに815ページあったが、増補改訂を重ね第6版は1194ページとなった。

34) ギデンズ(2009:384-427)

て設定される。そして以下、第1節に当たる「健康と病気の社会学」で医療についての社会学的視点とはどのようなものが総括され、第2節に当たる「健康の社会的基盤」で健康ないし病気の社会的要因について、階級と健康、ジェンダーと健康、民族と健康、健康と社会的凝集（社会的連帯）の関連が問われ、第3節に当たる「障害の社会学」で障害の社会学の達成点が個人モデルから社会モデルへ、そして社会モデルの批判への展開として紹介される。

「健康と病気の社会学」では、先進社会の病気としての拒食症について価値観の変容や食のグローバル化やテクノロジー化との関連が指摘され、スリムな身体への追求が社会的、文化的影響を受けての結果であることが確認され、次に医療にかかわる社会学的分析の視点が、近代医療の基盤である生物医学的モデルを検討対象に提示される。その医療モデルは公衆衛生に関心を強めた国民国家による国民の健康管理や人口管理の必要とも関連しながら科学的、専門的モデルとして発展したが、それに対して科学的医療の過大評価、患者の意見や経験の軽視、代替医療（コラムでも紹介）の無視、医療対象化（コラムでは多動性治療薬リタリン問題を例示）の権力、政治的操作への加担などと多くの批判がなされていることを紹介し、身体に作用する近代医療技術にかかわる社会的要因を明らかにした。また、変動する世界における医療と健康の問題が先進社会におけるライフスタイルの選択として一層身体に作用する社会的影響を増大させていることを示し、さらにはグローバルな視点でエイズ問題を検討しエイズという病気の流行に影響する社会的要因を明らかにすることによって、健康と病気をめぐる社会的視点が確認される。そして次にパーソンズの病人役割論とそれへの批判を取り上げ、病気の身体をもつ人間に役割規定力を発揮する社会的影響や、病気を生活の中に組み入れ病気の意味を読み解き他者への病気説明方法を生成する病人の生きられた体験過程を、健康と病気の社会学のテーマとして設定する。

次に「健康の社会的基盤」というテーマで、健康と病気の社会学の視点を明示しうる問題領域として階級と健康、ジェンダーと健康、民族と健康、健康と社会統合の関連が取り上げられる。階級の差異と病気罹患率は明らかに

相関しており、その説明仮説には病気への社会的影響が組み込まれざるをえない。説明仮説をめぐっては個人の責任か社会の責任かという社会的争点も発生する。同様にジェンダーの差異もエスニシティの差異も病気と相関関係を示しており、社会的影響ないし文化的影響の強さが明らかである。なお、ストレスに起因する女性の病気は支援ネットワークないし社会的サポートがあれば緩和されることを指摘し、社会的連帯性の影響の強さを評価するが、それは最後に取り上げられた病気と社会の結合度（凝集性）との相関の議論につながる。社会的接触の密度、コミュニティ内結合、社会的サポートの入手可能性、安心感などが病気罹患を防ぎ健康回復に貢献するというのである。。

最後に「障害の社会学」として、障害は個人の不運である、身体の機能減損が障害の原因であると見る障害の個人モデルを批判して成立した障害の社会モデルを紹介し、障害の原因は個人にではなく社会にあることを強調する社会モデルを評価する。障害を成立させるのも解消するのも社会的要因であると見なす社会モデルは、健康と病気の社会学の基本的視点を生かしているのだが、それとともにそれが批判される面もあることをギデンズは紹介する。機能減損による当事者の日常的経験の軽視、障害者というレッテル貼りの不可欠性、障害と機能減損とを区別する見方、それらが社会モデルの難点とされるのである（コラムでは事例として骨形成異常の症状をもつ女性の人生が紹介される）。ただしギデンズは両者は対立するというより、総合されるべきであるという立場をとる。なお、障害の社会学としてさらに付加されるのは、イギリスのみならず世界の障害者問題であり、障害者問題にかかわる法律と公共政策の紹介と、世界では機能減損の人々の大半は発展途上社会に生きていること、政策や制度が不備であることの指摘が行われる。

以上がギデンズの身体の社会学の概要であるが、実のところそれは初版から同じだったわけではないし、身体の社会学という領域設定自体も第3版に初めて登場した。それでは『社会学』における身体の社会学の成立過程を、各版の章編成の紹介も兼ねてまとめておこう。

『社会学』の初版ギデンズ（1989＝1992）は22章編成で、しかもそれらはさ

らに6部に編成されていた。第1部「社会学序説」に第1章「社会学」、第2部「文化と社会」に「社会化とライフサイクル」、「社会的相互行為と日常生活」、「同調と逸脱」、「ジェンダーとセクシュアリティ」、第3部「権力の構造」に「社会成層と階級構造」、「エスニシティーと人種」、「集団と組織」、「政治と政府と国家」、「戦争と軍隊」、第4部「社会制度」に「親族と婚姻と家族」、「教育とコミュニケーションと情報媒体」、「宗教」、「労働と経済生活」、第5部「世界の社会変動」に「社会生活のグローバル化」、「現代のアーバニズム」、「人口と健康と高齢化」、「革命と社会運動」、「社会変動の過去現在未来」、そして第6部「社会学の方法と理論」に「研究調査法」、「社会学理論」がそれぞれ配置されていたのである。

1993年の第2版ギデンズ(1993=1993)の内容は社会の変化に対応して改訂され、図表やデータなども更新されたが、編成は初版と同じであり、編成が大幅に変更となったのは、1997年の第3版ギデンズ(1997=1999)においてであった。第3版では部編成が廃止され、章の数も1章削減され21章編成となった。第1章「社会学」から始まり、「文化と社会と個人」、「社会類型」、「社会的相互行為と日常生活」、「ジェンダーとセクシュアリティ」、「身体摂食と病気と高齢化」、「家族」、「逸脱と犯罪」、「エスニシティーと人種」、「社会成層と階級構造」、「集団と組織」、「労働と経済生活」、「政治権力と政府と戦争」、「マスメディアとポピュラー文化」、「教育」、「宗教」、「現代のアーバニズム」、「革命と社会運動」、「グローバルな変動と生態系の危機」、そして「研究調査法」と「社会学理論」と続く。見られるようにまず「人口と健康と高齢化」がなくなり「身体　摂食と病気と高齢化」が入り、「社会化とライフサイクル」がなくなり「社会類型」が増え、「政治と政府と国家」と「戦争と軍隊」が合体し「政治権力と政府と戦争」となり、「教育とコミュニケーションと情報媒体」が「マスメディアとポピュラー文化」と「教育」に分化し、「社会生活のグローバル化」と「社会変動の過去現在未来」が合体し「グローバルな変動と生態系の危機」になっている。この結果、1章削減となったのである。

前述のように『社会学』において身体社会学という表現が初めて登場したのは、この第3版であった。第6章「身体 摂食, 病気, 高齢化」は拒食症に関する短い導入部に続いて、身体と社会, 摂食異常と身体教化, 身体と生殖テクノロジー, 健全に機能する身体, 診療制度, 健康と地球環境, 健康と高齢化, 結びという諸節によって構成されていたが、その第1節にあたる身体と社会において、身体社会学が第1に身体への社会的影響を研究すること、第2に身体社会学は社会変動が身体に及ぼす影響、身体非自然化というトレンドをテーマとすることが宣言された<sup>35)</sup>。

次の2001年の第4版ギデンズ(2001=2004)は同じく21章編成であるが、「社会類型」が「変わりゆく世界」に、「革命と社会運動」が「貧困と福祉と社会的排除」に変更された。そして「身体 摂食, 病気, 高齢化」はタイトルが「身体社会学 健康, 病気, 高齢化」に変更され、初めて身体社会学が章のタイトルとして登場した。その内容も導入部は拒食症から代替医療に変わり、身体社会学, 健康の社会的基盤, 医療と社会, 健康と病気についての社会学的視点, 健康と高齢化, 高齢化の未来という節編成となった<sup>36)</sup>。

そして2006年の第5版ギデンズ(2006=2009)は、第4版から1章増えて22章編成となった。増えたのは結果的に第6章「社会化, ライフコース, 高齢化」であるが、その他の大きな変更としては、最後に配置されて来た「研究調査法」と「社会学理論」が第3章と第4章として前半部に位置変更となり、第2章「文化と社会」と第3章「変わりゆく社会」が合体し第2章「グローバル化と変動する社会」になるとともに、第3章「変わりゆく社会」の最終節が独立して第11章「グローバル化と不平等」が新設されたのである。

身体社会学にも大きな改訂が加えられた。第4版で章のタイトルとなった身体社会学は、第5版では章のタイトルから消え、ストレートに具体的問題である「健康, 病気, および障害」が章のタイトルとなり、身体社会学

---

35) ギデンズ(1997:116 37=1999:150 73)

36) ギデンズ(2001:140 69=2004:188 220)

学は節の名称にいわば格下げされた。さらに初版以来、健康というテーマと不即不離の関係にあった高齢化が「健康，病気，および障害」から削除され障害の社会学に代替され，高齢化は新たに設けられた第6章「社会化，ライフコース，高齢化」に含まれることになった。第8章「健康，病気，および障害」の内容は，まず導入部あたる部分が第4版の代替医療から再び拒食症の問題になり，節編成は身体の社会学，健康と病気の社会学，医療をめぐる社会的視座，健康の社会的基盤，障害の社会学に改められたのである<sup>37)</sup>。

最新版の第6版ギデンズ（2009）は，第5版に新たに1章が加えられ22章編成が23章編成となった。第23章に「国民，戦争，テロリズム」が追加されたのである。また，第1章「社会学とは何か」は同じだが，第2章「グローバル化と変動する社会」と第3章・4章の方法論，理論が入れ替わり，「グローバル化と変動する社会」は第4章になっている。また，第22章にあった「環境とリスク」が第5章になり，第21章にあった「都市と都市的空間」が第6章に配置替えとなり，その結果，第5章以下，第6版では2章ずつ順送りに第7章から配置されている。そのため第8章にあった「健康，病気および障害」は第10章になった。なお，第20章「政治，統治，テロリズム」は第6版では「政治，政府，社会運動」となり第22章に，第5版では第20章後半の内容であったナショナリズムと民族，テロリズムが増補され独立し，第6版の最終章である第23章となったのである。

以上で紹介してきたように，ギデンズの『社会学』において身体の社会学は，内容的には初版の「人口，健康，および高齢化」から始まるが，第3版において「身体 摂食，病気，高齢化」として内容が再編され，人口が削除されるとともに健康の内容が増補され，身体の社会学という名称が初めて本文中に登場したのであった。そして第4版では「身体」から「身体の社会学」へと章のタイトルが変更され，内容的にも摂食という限定的テーマから再び

---

37) ギデンズ（2006:252-91 = 2009:274-314）

健康という包括的な名称に変更され「身体社会学 健康, 病気, 高齢化」となり, 人口は第19章「人口成長と生態系の危機」に再び組み込まれた。次いで第5版では「身体社会学」から「健康, 病気, 障害」に章のタイトルが変わり, 身体社会学は本文中に再び差し戻され, また高齢化が第6章「社会化, ライフコース, 高齢化」に移され, その代わりに障害が増補されるに至ったのである。また人口は新たに設けられた第11章「グローバル化と不平等」に移された。そして第6版では内容的に若干の増補はあるものの第5版の形式と内容が踏襲されたのである。

ギデンズによる身体社会学の領域設定はどう評価できるだろうか。初版以来一貫しているのは健康および病気というテーマであり, 人口と高齢化は結局, 身体社会学からは排除されることになった。ただし, 国民国家による人口管理ないし身体の生産と再生産という問題と, 高齢化に伴う人々の障害者化という問題は, 身体社会学に含まれていると見ることができる。それでは身体社会学という名称の位置づけについてはどうだろうか。第4版では初めて章のタイトルとなったが, それは第4版限りのことであり, 第5版以降は章の最初の紹介部分に登場するだけとなった。なぜか。医療と健康, そして障害のテーマが身体社会学の対象領域であるのはもちろんであるが, それだけではないということが表明されているのではないと思われる。人口や高齢化だけではなくセクシュアリティやジェンダーも身体に深くかわるし, さらに初版以来, 「社会的相互行為と日常生活」において, 相互行為における顔と身体, 発話に関するゴフマンの議論が紹介されている。これは第1節で紹介した『社会の構成』でのゴフマンを参照しつつ展開された相互行為論ないし社会過程論なのであった。このように『社会学』においては, 身体社会学と命名される章以外にも, 実質的に身体社会学の内容にふさわしいものが各所に配置されていると見ることができるのである。

## おわりに

本稿ではギデンズの一般理論における身体概念の位置づけ, 現代社会論に



おける身体問題の検討，そしてテキスト『社会学』における身体の社会学の領域設定について，その内容を紹介してきた。それらを総合すると，身体社会学はどのように構想しうのだろうか。まず第1に，一般理論において身体社会学の枠組みが設定され，第2に，それに対応して現代社会論ないし個別社会学としての身体社会学の具体的内容が展開されるということになるだろう。

ギデンズが構造化理論で提示した内容を敷衍するならば，まず行為とは，身体の動員を媒介にした諸資源の相互媒介的動員と定義され，さらに行為が身体を基点とした諸資源の相互媒介的動員過程と，意味世界における目標形成過程との相互媒介的過程であると把握される<sup>38)</sup>。そして資源としての身体の問題には，資源の生産，生成，加工の問題と，資源の状態の問題と，資源の動員の方法の問題とがあり，それぞれについて社会的・文化的条件および社会的・文化的帰結との関連が問われる。すなわち構造的な条件としての社会的・文化的条件の影響や作用のもとで，あるいはまた社会的・文化的帰結との関連のもとで，資源の生産，生成，加工の諸過程や，資源の状態，資源の動員の方法などが把握されるのだが，それらは同時に行為の主体である人間による身体の意味づけ，意味づけられる身体の問題としても把握される。資源としての身体は意味づけられた身体としても存在するのである。

このように一般理論的に身体社会学の大枠を設定すると，問われるべき論点が鮮明になり，ギデンズにおいて欠落していた論点も明示されることになる。資源としての身体は人口や遺伝子工学の問題にかかわり，あるいはまたセクシュアリティの問題にもかかわる。これらは『社会学』に含まれていた問題領域であったし，胎児の問題はハイモダニティ論にも含まれていた。資源としての身体の生成については，身体加工は資源としての利用という側面だけでなく，身体を媒介にした表現ということで，パーソナリティ

---

38) この議論の詳細は宮本(2009:179, 358)を参照されたい。

やアイデンティティの問題にかかわる領域でもある。これがハイモダニティ論における身体問題、いわゆる身体体制の問題であった。また資源としての身体の状態については、健康や病気、そして障害の問題にかかわり、これが『社会学』における身体社会学の問題設定であったが、身体の状態は身体的拘束条件としてもとらえられ、それについては『社会の構成』で構造論の一環に位置づけられていた。そして、身体の動員については、個々の行為主体による身体技法といった領域から、諸身体すなわち人々の組織化の問題までを含むが、それらは身体を媒介にした資源動員能力すなわちパワーの問題であり、さらには多様な場に存在する身体を動員しうるパワーすなわち権力の問題である。それらは構造化理論において行為の概念規定、相互行為における身体の位置づけ、身体の域化論、変動とパワー論などで取り組まれていた。

それではギデنزによって、身体社会学の多様な論点ないし問題領域は包括され、身体社会学の体系化は成し遂げられたと言えるのであろうか。たしかに『社会学』で健康と病気と障害の問題領域に身体社会学という名称が付与されていることだけを考えれば、ギデنزの身体社会学はきわめて狭い限定的な内容しかもたないと判定されよう。しかし、『社会学』においても人口や高齢化やセクシュアリティといった身体と深くかかわる問題領域は別の章に収められているし、教科書としての『社会学』の制約上組み込めなかったであろう構造化理論とハイモダニティ論における身体論を参照するならば、ギデنزの身体社会学の全体像と可能性を見いだすことができるのである。たとえば身体社会学で取り上げるべきテーマと思われる、感覚ないし知覚への社会的・文化的規定性の問題は健康・病気・障害同様に身体の状態にかかわるのであるし、化粧や身体加工の問題はハイモダニティにおける身体体制にかかわるものと位置づけられよう。

## 参考文献一覧

ギデنز(1973) Giddens, A., *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson. 市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房, 1977年。

- ギデنز( 1976, 2nd. ed., 1993 ) Giddens, A., *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson. 松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法基準』而立書房, 1987年。第 2 版, 2000年。
- ギデنز( 1979 ) Giddens, A., *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press. 友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』ハーベスト社, 1989年。
- ギデنز( 1981 ) Giddens, A., *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press. 『史的唯物論の現代的批判』。
- ギデنز( 1984 ) Giddens, A., *Constitution of Society*, Polity Press. 『社会の構成』。
- ギデنز( 1985 ) Giddens, A., *Nation·State and Violence*, Polity Press. 松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房, 1999年。
- ギデنز( 1989 ) Giddens, A., *Sociology*, Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学』而立書房, 1992年。
- ギデنز( 1990 ) Giddens, A., *The Consequences of Modernity*, Polity Press. 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? モダニティの帰結』而立書房, 1993年。
- ギデنز( 1991 ) Giddens, A., *Modernity and Self·Identity:Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. 秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社, 2005年。
- ギデنز( 1993 ) Giddens, A., *Sociology*, 2nd. ed., Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学改訂新版』而立書房, 1993年。
- ギデنز( 1997 ) Giddens, A., *Sociology*, 3rd. ed., Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学改訂第 3 版』而立書房, 1999年。
- ギデنز( 2001 ) Giddens, A., *Sociology*, 4th. ed., Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学第 4 版』而立書房, 2004年。
- ギデنز( 2006 ) Giddens, A., *Sociology*, 5th. ed., Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学第 5 版』而立書房, 2009年。

ギデنز(2009) Giddens, A., *Sociology*, 6th. ed., Polity Press. 『社会学  
第6版』。

後藤吉彦(2007) 『身体社会学のブレークスルー』生活書院。

宮本孝二(1998) 『ギデنزの社会理論 その全体像と可能性』八千代出版。

宮本孝二(2000) 「社会学とリフレキシヴィティ」『ソシオロジ』第45巻, 第  
1号。

宮本孝二(2002) 「ギデنزの社会学 構造化, ハイ・モダニティ, 第三の  
道」『社会学史研究』第24号。

宮本孝二(2006) 「ギデنزの社会理論」新睦人編『新しい社会学のあゆみ』  
有斐閣。

宮本孝二(2008) 「ギデنزの視点から」『社会学史研究』第30号。

宮本孝二(2009) 『社会理論25講』八千代出版。

# The Sociology of the Body in Giddens' Social Theory

Kouji MIYAMOTO

This paper aims to show how Anthony Giddens, who is one of the most famous sociologists in modern sociology, has coped with problems in constructing the sociology of the body.

First, it is showed that he elaborated 'body' as a theoretical concept and discussed theoretical points concerning it in the structuration theory (his general social theory).

Second, through investigating his theory of modern societies, we find various aspects of body problems in high modernity, problems of body regimes and of the reproduction of the body.

Third, by analyzing the contents of his textbook *Sociology*, which has been revised six times, we show details and particulars in the process in which he has constructed the sociology of the body.

Key words:

sociology of the body, Giddens, structuration, high modernity